『入菩提行論』・同『細疏』第 8 章和訳
－第 90-110 頌（自他平等）－

櫻　井　宣　明

序

シャーンティデーヴァの『入菩提行論』（以下 *BCA*）の第 8 禅定波羅蜜章[1]は，禅定を深めつつ菩提行へと修行者を導くことが主題であり，前半には世間の捨離であり欲望などの除去である孤高（viveka 遠離，第 1-89 頌），後半には他者を自己と同じものと観察していく自他平等（parātmasamatā，第 90-110 頌）と，他者に意識を結びつけることで慈悲を実践していく自他転換（parātmaparivartana，第 111-184 頌）が論じられている．

そもそも *BCA* は，10c 後半頃の僧院内で改編されたと推測される増広本であり[2]，*BCA* に先行する敦煌本[3]では自他平等・自他転換が精進波羅蜜章で論じられていることから，これら孤高・自他平等・自他転換は，禅定波羅蜜の範疇において関連付けられて改編されたものと推測されている[4]．

本文，ならびに各注釈書[5]を検討すると，これら孤高・自他平等・自他転換は，決して瞑想法としてそれぞれが単独に用いられるものではなく，次第として各自に役割があり，禅定の完成へと修行者を導く内容であることが分かる．

そこで注目されるのは，孤高から自他平等へと進展するに際しての修行者の立場である．第 89 頌では，

「以上のようなあり方で孤高の特質を観察することにより，雑念を鎮める者は，菩提心を起こしていくべきである」（evam-ādibhir ākārair viveka-guṇa-bhāvanāt /

---

[1] Śāntideva（寂天,650-700/690-750 頃）の *Bodhicaryāvatāra*「禅定波羅蜜と名付けられる第 8 章」（dhyānapāramitā nāma aṣṭamaḥ paricchedaḥ）.

[2] 斉藤明「*Bodhi(sattva)caryāvatāra* と *Śikṣāsamuccaya*」『印度哲学仏教学』第 16 号, 2001 年，p.20.

[3] 敦煌出土チベット語文献中『入菩薩行論（*Byang c(h)ub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa*＝*Bodhisattva-caryāvatāra*）』.

[4] なお，敦煌本と *BCA* 両方の存在を知る当時の注釈者たちの間に，「自他平等と自他転換を精進波羅蜜章に置くべきか，禅定波羅蜜章に置くべきか」という論争があったという．斉藤明「敦煌出土アクシャヤマティ作『入菩薩行論』とその周辺」『チベットの仏教と社会』春秋社, 1986 年，p.99.

[5] Prajñākaramati（10c 末-11c 初, Vaidya 本），Vibhūticandra（12c 後-13c 初, D 3880, P 5282），Kalyāṇadeva（11c 前, D 3874, P 5275），Vairocanarakṣita（11c 中, D 3875B, P 5277）.

Acta Tibetica et Buddhica 3: 191-215, 2010.
© Faculty of Buddhism, Minobusan University, JAPAN

upaśānta-vitarkaḥ san bodhicittaṃ tu bhāvayet //89//）

と述べ，修行者に発心を求めている．これに対してプラジュニャーカラマティが，「このように清浄な心の中で菩提心を起こしている者は，最高の境地に昇る」（evaṃ pariśuddhe cetasi bhāvyamānaṃ bodhicittaṃ prakarṣa-padam adhirohati［Vaidya p.155.25］）と位置付けるように，菩提心の発動を覚りに直結させている．

筆者はこれまでに，孤高を空・無分別と位置付ける注釈者たちの見解を提示した[6]．自他平等の論述はまさにこの立場から始まると考えたからである．

これに続いて本稿では，自他平等に該当する第 90-110 頌の和訳を，プラジュニャーカラマティの注釈『入菩提行論細疏』（以下 *BCAP*）[7]と併せて提示することで，*BCA* の禅定波羅蜜章を理解する一助としたい．

○『入菩提行論』・同『細疏』第 8 章第 90-110 頌和訳

Vaidya 155.27-156.5 (Tib D 165a6-165b3, P 182b3-8)

tatra yāvad ekatvaṃ pareṣu nâtmanā kriyate, na tāvad para-hita-sukhāya samyak cittaṃ calati, ātma-grāhasyâtmany eva viśeṣeṇa pravṛtteḥ /[8] ato 'sya nivṛttaye-

そこで，自ら他者の内に一体であるとなさないかぎりは，そのかぎりは他者の利益と安楽のために正しく心が働くことはないのである．〔自他の〕差別によって，まさに己の内に自己把捉が発動する故に．それ故に，このこと（＝差別による自己把捉）を抑制するために－

parâtma-samatām ādau bhāvayed evam ādarāt /（90ab）

まず初めに「他者と自己は同様である」（＝自他平等）と，注意深く次のように観察すべきである．（第 90 頌 ab）

ādau prathamataḥ / paścāt parâtma-parivartanam iti bhāvaḥ /[9] **evam** iti vakṣyamāṇa-nītyā / **ādarād** iti mahatābhiniveśena/ tasyā evâkāraṃ darśayati-

「**まずは**」とは最初にということであり，「後に自他転換を〔実修すべき〕」という趣旨である．「**次のように**」とは後述する規範によってである．「**注意深く**」とは，大い

---

[6] 拙稿「『入菩提行論』第 8 禅定波羅蜜章における孤高（viveka）の役割」（『印度学仏教学研究』第 56 巻第 1 号, 2007 年）pp.97-100.

[7] Prajñākaramati の *Bodhicaryāvatārapañjikā*.

[8] Tib: bdag tu 'dzin pa ni bdag nyid la khyad par du 'jug pa'i phyir ro // (D 165a6, P 182b3)

[9] Tib: de'i phyir 'di bzlog par bya ba'i ched du dang por te thog mar bdag dang gzhan du mnyam pa (D po) bsgom par bya ste / phyi nas ni bdag dang gzhan du brje ba'o zhes pa'i don to / (D 165a7, P 182b4)

に専心してということである．それ（＝自他平等）こそが〔自己把捉を還滅させる〕方法であることが示されるー

sama-duḥkha-sukhāḥ sarve pālanīyā mayâtmavat //90//
すべての人々にとって，苦や安楽は同様のものである．〔それ故に，彼らは〕私によって自己に対するように護られるべきである．（第 90 頌 cd）

[10]matto nâmīṣāṃ kaścid viśeṣo 'sti / ato yathā mama duḥkhaṃ bādhakaṃ tathâîṣām api / yathā mama sukham anugrāhakaṃ tathâîṣām api / iti tulya-**duḥkha-sukhāḥ sarve** prāṇino bhavanti / tasmāt **pālanīyā mayâtmavat /** yathâtmā duḥkhād duḥkha-hetor vā samuddhariyate, tathânye 'pi sattvāḥ samuddharaṇīyāḥ / yathâtmā sarvathā sukhī-kartum iṣyate, tathânye 'pîti paripālanīyā ātmavat //
彼らには，私とのいかなる差別も存在しない．それ故に，私の苦が悩ますものであるように，彼らの〔苦〕もまた同様である．私の安楽が好ましいものであるように，彼らの〔安楽〕もまた同様である．このように，**すべての**有情たちにとって，**苦や安楽は**等しいものである．それ故に，**私によって自己に対するように護られるべきである**．あたかも私が苦や苦の原因から救われるように，他の人々もまた救われるべきである．あたかも私があらゆる点で安楽でありたいと欲するように，他の人々もまた〔安楽でありたいと欲されるべきである〕．以上のように，〔他の人々も〕自分の如く護られるべきである．

Vaidya 156.6-156.16 (Tib D 165b3-6, P 182b8-183a6)

nanu katham ātmanâneka—prakāra-gati-bheda-bhinnānāṃ sattvānām ekatvaṃ setsyati, abinna-sukkha-duḥkha-svabhāvatvaṃ ca katham?[11] ity atrâha-

〔反論：〕どうして多類なる趣生という区分に分かれた人々（＝六趣）が，自己と一体だと成立するのだろうか．またどうして，苦や安楽が本質的に異ならないと〔成立するのだろうか〕？ このような〔反論に〕対して述べられるー

hastâdi-bhedena bahu-prakāraḥ kāyo yathâîkaḥ paripālanīyaḥ /
tathā jagad-bhinnam abhinna-duḥkha-sukhâtmakaṃ sarvam idaṃ tathâîva //91//[12]

---

[10] Tib では次の文から始まる． bde dang sdug bsngal mnyam pas zhes pa ni de nyid kyi rnam pa (P snam pa) ston pa yin no // (D 165a7, P 182b5)
[11] Tib: bde ba dang sdug bsngal ba tha mi dad par yang ji ltar 'dod par 'gyur zhe na / (D 165b3, P 183a1)
[12] Tib: lag pa la sogs dbye ba rnam mang yang // yongs su bsrung bya'i lus su gcig pa ltar // de bzhin 'gro ba tha dad bde sdug dag // (P 'gro ba'i bde sdug tha dad dag //) thams cad bdag bzhin bde ba 'dod mnyam gcig // 91 (D

手などの区分によって多くの部分よりなる身体は，あたかも一体であるかのように護られるべきである．そのように，世界には〔六趣という〕区別がありながら，苦や安楽は本質として異なることはない．故に，このすべて（＝世界）は同様に〔一体のものとして護られるべきである〕．（第 91 頌）

kara-caraṇa-śiraḥ-prabhṛti-**bhedād** aneka-**prakāraḥ kāyo yathâîka**tvenâdhyavasitaḥ **paripālanīyo** bhavati duḥkha-nivartanāt sukhôpadhānāc ca, **tathā** [13] **jagat** sattva-lokaḥ abhinnam ekatvenâdhyavasitam ātmanaḥ paripālanīyaṃ bhavati / **abhinna-duḥkha-sukhâtmakaṃ** ca / lupta-cakāro nirdeśaḥ / tathâîva hastâdi-bhedavad eva **sarvam idam** iti bahu-prakāra-gati-bheda-bhinnam api / ayam abhiprāyo- yathâbhyāsād ekatvâdhyavasāyo ’smin kāye ekatvam antareṇâpi, tathâneka-prakāre jagaty apîti na kaścid viśeṣaḥ //
腕・足・頭を始めとする**区分**により，複数の**部分よりなる身体は，あたかも一体**のものとして想定され，**護られるべきなのである**．苦を退け，また安楽をもたらすために．**同様に，世界**，〔すなわち〕有情世間には区別がなく，一体と想定されたものである故に，自ら護るべきなのである．しかも**苦や安楽は本質として異なることはない**．〔ここに〕隠されていた *ca* 字が明らかとなる．まさにそのように，「手などの区分の如くに，**このすべては･･･**」とは多種なる趣生という区分に分離したもの（＝六趣）である．

以下の意味であるーおよそ反復によって，一体ではないこの身体において一体であると想定するように，そのように多種なる世界においても〔一体であると想定すべきである〕．決して差別は存在しないのである．

Vaidya 156.17-23 (Tib D 165b6-166a2, P 183a6-8)

syād etat–yadi bhavatā saha jagad eka-svabhāvam, tadā katham iva bhavato duḥkham anya-saṃtāneṣu na bādhakaṃ syāt ? evaṃ viparyaye ’pi yojyam ity āśaṅkyâha–

次のように〔反論される〕であろうーもし汝と共にある世界が同一の本質を持っているならば，その場合はどうして汝の苦が他者の〔身〕相続に対して侵害することがないのか．このような誤謬にも結びついてしまう．このような〔反論が〕想定されて述べられるー

yady apy anyeṣu deheṣu mad-duḥkhaṃ na prabādhate/
tathâpi tad-duḥkham eva mamâtma-sneha-duḥsahaṃ //92//

27a2, P 30b2)
[13] Vaidya: om. tathā

私の苦は他の人々の身体を悩ますことがないけれども，しかしその苦はまさに私のものであり，自己に対する愛着によって耐え難いのである．（第 92 頌）

anyeṣv apareṣu śarīreṣu **mama duḥkhaṃ yadi** nāma **prabādhakaṃ na** bhavati, **tathâpi tad-duḥkham eva mama** / kutaḥ? **ātmani snehena duḥsahaṃ** soḍhum aśakyam/ hetu-padam etat / aṃśena pravṛttāv api duḥkha-svabhāvatāṃ na muñcaî̃ty arthaḥ / evaṃ viparyayo 'pi vyākhyeyaḥ //

私の苦が，他の人々，〔すなわち〕別の肉体を侵害することがないけれども，しかしその苦は私のものである．なぜなら，自己に対する愛着によって耐え難い，〔すなわち〕辛抱することができないからである．以下は理由の文である．

「〔苦が自他に〕分有して現れるとしても，苦の性質が否定されることはない」という意味である．このように誤謬は解決されるべきである．

Vaidya 156.24-26 (Tib D 166a2, P 183a8-b1)

tathā yady apy asaṃvedyam anyad-duḥkhaṃ mayâtmanā /
tathâpi tasya tad-duḥkham ātma-snehena duḥsahaṃ //93//

同様に，他者の苦は私自身には知られないけれども，しかしその苦は彼のものであり，自己に対する愛着によって耐え難いのである．（第 93 頌）

ataḥ sva-para-viśeṣam apāsya duḥkha-svabhāvatâîva nivartana-hetuḥ / ata āha–

このことから，自他の差別を放棄し，苦が自性であることこそが退けられる主題となる．そこで述べられる－

Vaidya 156.27-157.5 (Tib D 166a2-7, P 183b1-6)

mayânya-duḥkhaṃ hantavyaṃ duḥkhatvād ātma-duḥkhavat / (94ab)

私によって他者の苦は滅ぼされるべきである．苦である故に．自己の苦の如し．（第 94 頌 ab）

yadyad duḥkhaṃ tattan **mayā hantavyam**, yathâ**tma-duḥkhaṃ** / duḥkhaṃ cêdam anya sattva-duḥkham iti svabhāva-hetu-prayogaḥ / duḥkha-svabhāvatā-mātra-bhāvinī hantavyatā / na câsiddhatā hetoḥ, aviśeṣaṇa duḥkha-svabhāvatāyāḥ prasādhitatvāt / na câpy anaikāntikatā, ātma-duḥkhasyâpi hantavyatā na syād aviśeṣād iti viparyaya-bādhakaṃ / viruddhatâpy ata eva na syāt // tathâyam aparaḥ prayogaḥ–

「何であれ苦であるものは，**私によって滅ぼされるべきである**．たとえば**自己の苦の如し**．また，他の有情の苦もこの苦である」という自性因[14]の論式である．滅ぼされるべきことは，苦が自性であることのみを示している．また不成因[15]ではない．「苦が自性であることに差別がない」と証明されている故に．また不定因[16]でもない．〔不定因であれば，〕「自己の苦もまた滅ぼされるべきことではないだろう．差別がない故に」という誤謬に侵害される故に．したがって，相違〔因〕[17]でもないだろう．そのように，以下は他の論式〔が述べられる〕－

anugrāhyā mayânye 'pi sattvatvād ātma-sattvavat //94//

私は他の人々さえも慈しむべきである．有情である故に．自己が有情であるが如し．（第 94 頌 cd）

ye sattvās te sarve **mayânugrāhyā**, yath**âtma-sattvaḥ** / **sattvāś** cânye 'pi prāṇina iti svabhāva-hetur eva / sattvâtmakatā-mātra-bhāviny anugrāhya-svabhāvâtra / ayam api nâsiddhaḥ, sattvâtmakatāyāḥ pakṣe prasiddhatvāt / ātmano 'nugrāhyatâbhāva- prasaṅgenânaikāntiko[18] 'pi na syāt / pūrvavan na viruddhaḥ //

「誰であれ有情ならば，すべて**私は慈しむべきである**．たとえば**自己が有情であるが如し**．また，他の生き物たちも**有情である**」という自性因[19]である．ここで慈しまれるべきことは，有情であることのみを示している．これも不成〔因〕[20]ではない．有情であることは主張命題に認められる性質である故に．また，「『自己が慈しまれなければならない』という〔条件を満たす喩例〕が存在しない」という過失によって，不

---

[14] ここでは自性因として，苦が自性であることが理由として扱われている．以下の論式となる．〔主張〕「苦であれば，私によって滅ぼされるべきである」，〔理由〕「苦は，すべての人々にとって耐え難い故に」，〔喩例〕「耐え難いものは，滅ぼされるべきである．例えば自己の苦の如し」．

[15] 不成因とは理由が誤っている，もしくは真偽不明のこと．ここでは，「苦は，すべての人々にとって耐え難い」という理由を，「苦が自性であることに，自他の差別がない」という前提で，論式を正当なものとする．

[16] 不定因とは同例を満たさない，もしくは異例を排除しないこと．ここでは，同例「滅ぼされるべきものは，耐え難いものである」を満たすか，もしくは異例「滅ぼされるべきでないものは，耐え難いものではない」を排除することで論式が正当なものとなるが，もし不定因であれば，「自己の苦」という喩例は「滅ぼされるべきでないこと」となる．

[17] 相違因とは同例を満たさなく，さらに異例を排除しないこと．（注）16 参照．

[18] Poussin: ātmano 'nugrāhyatā 'bhāva-prasaṅgenânaikāntiko (p.330.16); Tib: bdag nyid la yang phan mi 'dogs par thal bar 'gyur bas ma nges pa yang ma yin la / (D 166a6, P 183b6)

[19] ここでは自性因として，慈しまれるべきものが理由として扱われている．以下の論式となる．〔主張〕「有情であれば，私によって慈しまれるべきである」，〔理由〕「すべての生き物は，有情である故に」，〔喩例〕「慈しまれるべきものは，有情である．例えば自己が有情である如し」．

[20] ここでは，「すべての生き物は，有情である故に」という理由を，「主題に認められる性質」という前提で，論式を正当なものとする．

定〔因〕[21]となることもないだろう．先の如く相違〔因〕でもない．

Vaidya 157.6-11 (Tib D 166a7-b1, P 183b6-8)

nanv asti viśeṣo ’nyasmād ātmani sukhâbhiniveśo nāma /[22] tathā tato ’yam anaikāntiko hetur iti / atrâha–

そもそも，安楽を希求することに，「他者よりも自己に」という差別は存在しないのである．それ故に，「このこと（＝自己だけに安楽を希求すること）は不定因である」と以下に述べられる－

yadā mama pareṣāṃ ca tulyam eva sukhaṃ priyaṃ /
tadâtmanaḥ ko viśeṣo yenâtrâîva sukhôdyamaḥ //95//[23]

私にとっても他の人々にとっても，安楽を好むことは全く同じである．その場合に，〔他者よりも〕自己に如何なる区別があって，そこ（＝自己）だけに安楽への努力がなされるのか．（第 95 頌）

tulyam eva samam **eva sukhaṃ priyam** iṣṭaṃ / **tadâtmanaḥ parasmāt ko viśeṣo**? nâîva kaścit yena tatrâivâtmany eva **sukhô**tpādanāya tātparyaṃ na parasminn ity arthaḥ //

安楽を好むこと，〔すなわち〕望むことは，**全く同じ**，〔すなわち〕等しい．**その場合に，他者よりも自己にどんな区別があるというのか**．決してないのである．それなのにどうしてそこだけ，〔すなわち〕自己のみに**安楽**を得るための目的があるというのか．決してないという意味である．

Vaidya 157.12-15 (Tib D 166b1-2, P 183b8-184a1)

prathame hetāv anaikāntikatāṃ pariharann āha–

はじめに，〔「自他に差別が存在する」という主張の〕因が不定であることを論破しようと述べられる－

---

[21] ここでは，同例「慈しまれるべきものは，有情である」を満たし，異例「慈しまれるべきでないものは，有情ではない」を排除することで論式が正当なものとなるが，もし不定因であれば，「有情である自己」という喩例は「慈しまれるべきでないもの」となる．

[22] Tib: sdug bsngal la (P las) mngon par zhen pa zhes pa bdag dang gzhan la khyad par yod pa ma yin nam / (D 166a7, P 183b6)

[23] Tib: gang tshe bdag dang gzhan gnyi ga // bde ba ’dod du mtshungs pa la // bdag dang khyad par ci yod na // gang phyir bdag gcig bde bar brtson // 95 (D 27a4, P 30b5)

yadā mama pareṣāṃ ca bhayaṃ duḥkhaṃ ca na priyaṃ /
tadâtmanaḥ ko viśeṣo yat taṃ rakṣāmi nêtaraṃ //96//[24]

私も他の人々も恐怖や苦を好まないとき，そのとき自己に如何なる区別があって，私はそれ（＝自己）を護り，他を〔護ら〕ないのか．（第 96 頌）

bhayam iti duḥkha-hetuḥ / **nêtaram** iti nânyaṃ //
「**恐怖**」とは苦の原因である．「**他を〔護ら〕ない**」とは他の人を〔護ら〕ないことである．

Vaidya 157.16-24 (Tib D 166b2-5, P 184a1-5)

syād etat– yadi nāma duḥkhâtmakatā na viśiṣyate, tathâpi yasya duḥkhena bādhā syāt, sa eva rakṣitum ucito nânya ity āha–[25]

次のように〔反論されよう〕ーもし〔各人の〕苦のあり方が区別されないならば，その場合，〔自己と他者は〕同じくその苦に悩まされよう．〔しかし〕それ（＝自己）は護りたいと思われ，他者は〔護りたいとは思われ〕ないのである．このような〔反論に対して〕述べられるー

tad-duḥkhena na me bādhêty ato yadi na rakṣyate/
nâgāmi-kāya-duḥkhān me bādhā tat kena rakṣyate//97//

その苦（＝他者の苦）が私を悩まさないことから，もし〔他者を〕護らないとするならば，未来の身体の苦が〔現在の〕私を悩ますことはないのに，なぜそれ（＝未来の身体）を護るのか．（第 97 頌）

tasya parasya **duḥkhena mama bādhā** pīḍā **nâsīty ato** 'smāt kāraṇād **yadi na rakṣyate** 'nyaḥ, tadā 'param idaṃ vyāhataṃ syāt / yato **nâgāminaḥ kāyasya** para-loka-bhāvino narakâdi-jātasya duḥkhâtmakasya [duḥkhān me] tasyôpāttasya kāyasya kācid **bādhā** saṃbhavati, tasyânyatvāt / iti lokôktau, tasmād arthe vā / yata evam, tasmāt **kenâ**bhiprāyeṇâsau **rakṣyate**? kāya iti prakṛtatvāt pāpān nivartanāt kuśale pravartanāc ca //

その，〔すなわち〕他者の**苦が私を悩ます**，〔すなわち〕苦しめる**ことはない．そのことから**，〔すなわち〕この理由により，**もし**他者を**護らないとするならば**，これは次

[24] Tib: gang tshe bdag dang gzhan gnyi ga // sdug bsngal mi 'dod mtshungs pa la // bdag dang khyad par ci yod na // gang phyir gzhan min bdag srung byed // 96 (D 27a5, P 30b6)
[25] Tib: de ltar gyur na yang sdug bsngal gcig gi bdag nyid du khyad par med par gyur pa de lta na yang / gang la sdug bsngal gyis gnod pa nyid kyis bsrung bar 'os kyi gzhan gyis ni ma yin no zhe na / (D 166b2, P 184a1)

の場合に矛盾していよう．つまり「**未来の身体**，〔すなわち〕地獄などに生じ，苦からなるものであって，来世の存在が受け取る身体が，〔現在の私を〕何ら**悩ますことはない**．それ（＝未来の身体）が他のものである故に」と世間で言われた場合，またはその意味の場合である．この場合に，そこに**どんな**目的があって**それ（＝未来の身体）を護るというのか**．「身体」を主題とすることで罪悪を滅するためであり，また善に進むためである．

Vaidya 157.25-158.9 (Tib D 166b5-167a3, P 184a5-b4)

athâpi syāt– aham eka sarvadā, tenâtra bhinnatvaṃ nâsti śarīrayoh / nâyaṃ doṣa ity atrâha–

次のように〔反論〕されようー私は常に同一である．それ故にここで二つ（＝現在と未来）の身体に分けられることはない．このことは過失ではない．このような〔反論〕に対して次のように述べられるー

aham eva tadâpīti mithyêyaṃ parikalpanā /[26] **(98ab)**

「そのとき（＝未来）も私である」とするならば，この分別は誤りである．（第98頌ab）

ātmano nirākariṣyamāṇatvāt nirastatvāc ca leśataḥ tatko ’yam ahaṃ pratyayasya viṣayo bhaviṣyati? tasmād ahaṃ pratyaya-viṣayasya kasyacid ekasyâbhāvān **mithyeyaṃ parikalpanā** ’dhyavasāyaḥ / **aham eva tadâpīti** / bhavântare ’pi / māyôpama-pañcôpādāna-skandha-mātrâlambana-tvād asya / itīdam apy adhyavasâya-vaśād ucyate, na tu punar asya vastutaḥ kiṃcid ālambanam asti, vikalpâtmakatvāt //

自己が排斥されるものである故に．また簡単に論破されるものである故に．どうしてこの「私」という観念の対象がありえようか．それ故に，何であれ「私」という観念の対象が一つのものとして存在することはないため，**分別は誤り**，〔すなわち〕執着である．「**そのときも私である**」とは，他の生涯のことである．これは幻の如き五取蘊のみが所縁である故に．このように，これ（＝「私」という観念）は執着のもたらす力によると言われている．この性質である故に，なんら所縁は存在しないのである．妄分別からなる故に．

kutaḥ punar iyaṃ mithyā-kalpanêty āha–

もちろん，これは誤った分別であると述べられるー

[26] Tib: bdag gis (P gi) de ni myong snyam pa’i // rnam par rtog de log pa ste // 98ab (D 27a6, P 30b8)

anya eva mṛto yasmād anya eva prajāyate //98//

なぜなら，死んだ者と生まれる者とはそれぞれ別のものである故に．（第 98 頌 cd）

yadā nâtmâdiḥ kaścid ekaḥ paraloka-gāmī saṃbhavati, skandha-mātram eva kevalaṃ, tadā na khalu yad eva skandha-pañcakam iha vinaśyati, tad eva punar apy utpadyate paraloke,[27] api tu apūrvam eva pūrva-nivṛttau tatrêdaṃ pratyayatā-viśiṣṭaṃ kleśa-karmâbhisaṃskṛtam antarâbhava-saṃtatyā samutpadyate / tasmād anādi-saṃsāra-pravṛtta-vitatha-vikalpâbhyāsa-vāsanā-vaśād ahaṃ pratyayo vitatha evôpajāyate // [28]

何であれ，自己などが一つのものとして来世に生ずることはない．蘊のみ，〔蘊〕だけである．その場合，「じつに五蘊を有する者がこの世で亡び，再び来世に生まれる」というのではない．そうではなく，まさに〔蘊が〕既に滅してこれから生じる場合，この縁起性によって特殊化された煩悩と業とによって形成されたもの（＝蘊）は，中有に持続して生じている．それ故に，無始の輪廻より生じた虚妄分別に基づく習慣の習気によって，「私」という虚妄なる観念が生ずるのである．

Vaidya 158.10-15 (Tib D 167a3-5, P 184b4-6)

kiṃ ca / idam aparaṃ tatra bādhakam ity āha–

しかもまた，これ（＝ある部分の苦）がその他を苦しめる場合として述べられる－

yadi yasyâîva yad-duḥkhaṃ rakṣyaṃ tasyâîva tan-mataṃ /
pāda-duḥkhaṃ na hastasya kasmāt tat tena rakṣyate //99// [29]

もし「苦であれば，その〔苦を感受している者〕が護るべき」と考えるなら，足の苦は手の苦ではないのに，どうしてそれ（＝足の苦）がそれ（＝手）によって護られるのか．（第 99 頌）

āstāṃ tāvad yad āgāmi-kāya-duḥkha-rakṣârthaṃ na yatitavyaṃ /[30] ihâîkasminn api kāye

---

[27] Tib: bdag gcig tu phung po lnga po tsam nyid yin la/ gang gi tshe bdag la sogs pa 'ga' zhig 'jig rten pha rol tu 'gro bar srid pa ma yin pa (P srid par ma ma yin pa) de'i tshe nges par phung po lnga po (P om. lnga po) de 'di nyid du 'jig par 'gyur ba ni ma yin te / de nyid 'jig rten pha rol tu skye bar 'gyur ro // (D 167a1, P 184b1)

[28] Tib: de'i phyir thog ma med pa'i 'khor ba nas 'jug pa'i rnam par rtog pa la goms pa'i bag chags kyi dbang la sogs pa'i rkyen gyis phyir phyin ci log pa nyid skye bar 'gyur ro / (D 167a3, P 184b3)

[29] Tib: gang tshe gang gi sdug bsngal gang // de ni de nyid kyis bsrung (D bsrungs) na // rkang pa'i sdug bsngal lag pas min // ci phyir des ni de bsrung bya // 99(D 27a7, P 31a1)

[30] Tib: gang gi tshe 'byung bar 'gyur ba'i lus kyi sdug bsngal bsrung ba'i don re shig zhog la / (D 167a4, P

pratyaṅga-bhedād bhinnaṃ duḥkhaṃ / tato yadânya-duḥkham anyasya rakṣituṃ na yujyate, tadā **kathaṃ pādâ**dau prahāraṃ patantaṃ dṛṣṭvā **hastaṃ** prasārya **rakṣyate**? anyatvâviśeṣān na yuktam etad ity arthaḥ //

未来の身体の苦を護るために努めるべきでないことは言を待たない．ここで身体が一体であるとしても，〔身体には〕部分という区別があって，苦は分離したものである．このため，ある者の苦が他の者に護られることは適当ではない．その場合，**どうして足**などが切られ，落ちるのを見て，**手**を差し出して**護られるのか**.「〔足と手が〕他のものであることに違いはない故に，これは不合理である」という意味である．

Vaidya 158.16-21 (Tib D 167a5-7, P 184b6-8)

atha–

そこで—

ayuktam api ced etad ahaṃkārāt pravartate /
yad ayuktaṃ nivartyaṃ tat svam anyac ca yathā-balaṃ //100//

もし「それ（＝手が足などの苦を除くこと）は不合理であるけれども，自己意識から起こるのである」とするならば，自己のもの（＝自己の苦）であれ他のもの（＝他者の苦）であれ，〔苦を除くという〕不合理は極力に還滅されるべきである．（第 100 頌）

ahaṃkāro 'smin kāye 'ham ity ātma-grahād ātmano 'bhāve 'pi /[31] **pravartate** jāyate pādâdau rakṣaṇa-manasikāraḥ / nâitat sādhu/ yato yad **ayuktaṃ** yuktyā saṃgataṃ na bhavati, tan **nivartyam** apasāryaṃ svakīyaṃ parakīyaṃ ca **yathābalaṃ** yathāsāmarthyaṃ / śakti-vaikalyād eva tad upekṣitum ucitam iti bhāvaḥ //[32]

「**自己意識**」とは，自己が存在しないにもかかわらず，自己把捉から，この身体の内に「私である」と〔考えることである〕.「**起こる**」とは，足などを護ろうとする意識が起きていることである．〔しかし足などは私のものではなく，〕このことは適切ではない．それ故に**不合理**，〔すなわち〕理に適っていないのであり，自己のものであれ，他者のものであれ，**極力に**，〔すなわち〕出来る限り**還滅されるべき**，〔すなわち〕取

184b4)

[31] Tib: 'on te 'di rigs pa yin na yang lus po 'di la bdag gir 'dzin pa ste / bdag ces pa bdag tu 'dzin pa las bdag med (D 167a5, P 184b6)

[32] Tib: de'i phyir gang gzhan gyi sdug bsngal gzhan gyis bsrung ba la 'bad bar mi rigs na / rkang pa la sogs pa la phangs pa gang zhig mthong ban a ci'i phyir lag pa la sogs pas skyong bar byed de / gzhan nyid du khyad par med pa'i phyir 'di rigs pa ma yin no zhes pa'i don to // (D 167a4, P 184b5)

り去られるべきである．〔しかし除く〕力が弱いからこそ，それ（＝自己意識）に頼ってしまっている，という趣旨である．

Vaidya 158.22-159.15 (Tib D 167a7-168a5, P 184b8-185b7)

syād etat– yadi nāmâtmâdir nâsti, tathâpi saṃtāno nāmâikaḥ saṃbhavati, tathā bahūnāṃ kara-caraṇâdīnāṃ samudāyaḥ śarīram ekaṃ / tad etad dvayaṃ yathāsaṃbhavam iha-loke paraloke câtma-duḥkhâpaharaṇâder niyāmakaṃ bhaviṣyati/ tato 'yam aviśeṣād ity asiddho hetuḥ, pūrvaś cânaikāntika ity āśaṅkyâha–

次のように〔反論〕されようーもし自己などが存在しないとするならば，その場合，相続は一つのものとして生ずるのである．同様に，手足などの多くのものは一つの身体としての集合となる．これら二種（＝相続・集合）は，〔もし来世の身体が他のものであるならば〕それぞれ現世や来世で自分の苦を除くことなどが制限されるのではないか．それ故に，この差別がないことは不成因である．先のことは不定因である．以上のように疑問が起こると〔想定されて〕述べられるー

saṃtānaḥ samudāyaś ca paṅkti-senâdivan mṛṣā /
yasya duḥkhaṃ sa nâsty asmāt kasya tat svaṃ bhaviṣyati //101//

相続や集合は，行列や軍隊などの如く虚妄なものである．苦の属する主体は存在しない．この故に，誰がそれ（＝苦）を己のものとするのか．（第 101 頌）

saṃtāno nāma na kaścid ekaḥ paramārtha-san saṃbhavati / kiṃ tarhi kārya-kāraṇa-bhāva-pravṛtta-kṣaṇa-paraṃparā-pravāha-rūpa evâyaṃ, tato vyatiriktasyânupalambhāt / tasmād eteṣām eva kṣaṇānām eka-padena pratipādanāya saṃketaḥ kṛto buddhair vyavahārârthaṃ saṃtāna iti / iti prajñapti-sann evâyam / tenâtrâbhiniveśo na kāryaḥ / anyathâtmanā kim aparāddhaṃ yenâsau na svīkriyate / evaṃ **samudāyo** 'pi na samudāyibhyo vastusann eko vidyate, tasya tebhyaḥ pṛthag anupalabdheḥ? tattvânyatva-vikalpas tv asyâvayavi-vicāreṇâiva gata iti nêha pratāryate /[33] tataś câyam api saṃvṛtisann eva pūrvavat / anayor yathā-saṃkhyam udāharaṇam āha– **paṅkti-senâdivad** iti / paṅktivat saṃtānaḥ, senâdivat samudāyaḥ / **ādi**-śavdān mālā-canâdayo gṛhyante /[34] yathânekeṣāṃ pipīlakâdīnāṃ pūrvâpara-bhāvena vyavasthitānāṃ sva-rūpam antareṇa paṅktir nâsti srak-sūtravad ekā, yadā[35] ca hasty-aśva-padāti-prabhṛtibhyo

[33] Tib: de nyid dang gzhan du brtags pa'i cha shas kyi rnam par dpyad pas mi gnas pa'i phyir 'dir brjod par mi bya ste / (D 167b4, P 185a6)
[34] Tib: rgyud ni phreng ba bzhin du yin la/ tshogs pa ni dmag la sogs pa bzhin yin pa la sogs pa'i sgras phreng ba dang / nags la sogs pa bzung ngo // (D 167a5, P 184b7)
[35] Poussin: yadā; Vaidya: yathā; Tib: gang gi tshe.

militebhyo vyatiriktā nânyā senā kācid ekā tatrâsti, tathā samudāyo ’pi / etac cânyatra vistareṇa vicāritam iti nêha vicariate / tasmād vastu- sadâlambanâbhāvān mṛṣāyaṃ pratyayaḥ / artho vā, vicārāsahatvāt / evam ātmâdeḥ svāminaḥ kasyacid abhāvād **yasya saṃbandhi duḥkhaṃ sa nâsti** / **ataḥ kasya tad** duḥkhaṃ **svâ**tmīyaṃ **bhaviṣyati**? nâîva kasyacid ity arthaḥ / nanu yady ātmâdir nâsti, tadā katham ayaṃ dṛṣṭānto bhaviṣyati ātmavad[36] iti ātma-sattvavad iti ca? satyam etat / kiṃ tu nêdaṃ vyasanitayā sādhanam abhidhīyate, kiṃ tarhi parasyâtma-grahâbhiniveśa-nivāraṇāya / tad yadi parasya nivṛtta evâtma-grahâbhiniveśaḥ, tadā na kiṃcit prayojanam anumāna-prayogasya / atha na nivṛttaḥ, tadā tad abhiprāyeṇâîva sva-para-vibhāgaṃ kṛtvā tat pratyāyanârthaṃ sādhanaṃ dṛṣṭāntaś côcyate, iti na dṛṣṭāntasyâsiddhir vyavahāra- ravartanāya /[37] kiṃ ca / idam upātta-pañca-skandha-mātram abhisaṃdhāya dṛṣṭānte dīyamāne na kācit kṣatiḥ, atrâîvâtma-śabdasya pravṛtter iti //

「**相続**」とは，一つのものとしての勝義的存在では決してない．そうではなく，これは因果関係によって起きている刹那継続の流れの相である．そこ（＝流れの相）から離れて〔相続を〕感受することはない故に．それ故に，これら諸々の刹那を一言で理解させるために仏陀たちによって協定がなされたのであり，実用のために「相続」としたのである．このようにこれ（＝相続）は施設としての存在である．それ故に，このことで執着を為すべきではない．そうでない場合，それ（＝相続）が承認されないことで，私によってどんな過失があるのか．同様に「**集合**」もまた諸々のものの結合であるため，一つのものとして存在するものではない．それ（＝集合）はそれら（＝諸々のものの結合）から離れて知覚されない故に．さらにこれ（＝集合）は，「有分を伺察することによって『そのもの』・『他のもの』という分別が起こる」とここで導いている訳ではない．それ故にまた，これ（＝集合）は先の如く施設としての存在である．

順次に両者（＝相続・集合）の実例が述べられている－「**行列や軍隊などの如く**」と．「行列の如き」が相続であり，「軍隊などの如き」が集合である．「**など**」という語によって花環や森などが考えられる．数多くの蟻などが前後に連なって配列しているように，行列とは自相を欠く故に，花環や経紐の如く一つのものとして存在することはない．またその場合，象・馬・歩兵を始めとする群がりと異なって他に，一つのものとして軍隊が存在することは決してないように，集合もまた〔決して存在しないのである〕．このことはまた，他所[38]で詳細に述べているので，ここでは精察されない．

以上のことから，常に事象の所縁は存在しないのであるから，この（＝事象の）観

---

[36] Tib: bdag sdug bzhin(D 168a2, P 185b3)

[37] Tib: de ltar na dpe ma grub pa yin te / (D 168a4, P 185b6)

[38] 『入菩提行論』第 9 般若波羅蜜章の第 73 頌に対するプラジュニャーカラマティの注釈に「相続」に関する詳細な記述がある．塚田貫康「入菩提行論細疏第九章試訳（7）」（『大崎学報』第 151 号，1995 年) pp.23-34 参照.

念は虚妄である．または対象が伺察に耐えられない性質であるから〔虚妄である〕．同様に自己などといった所有主はどんなものであれ存在しないから，**苦の属するもの〔と想定される〕それ（＝所有者）は存在しない．この故に，それ**，〔すなわち〕苦を**自分自身のものと誰がするのか**．誰のものでもない，という意味である．

〔反論：〕もし自己などが存在しないとしたら，その場合，次の実例はどうなるのか．「自己の如し」（8-90cd）や「自己が有情である如し」（8-94cd），と．

〔答：〕真実は次のものである．これ（＝実例）は執着によった証明理由と考えられるのではない．そうではなく，じつに他我を把捉する偏りを阻止するためである．もし〔自己の否定によって〕他我を把捉する偏りが還滅するのであれば，その場合，推論式の目的（＝「他者の苦は護られるべき」）は決して存在しないのである．しかし〔他我を把捉する偏りが〕滅しないならば，その場合，その目的によってこそ自他の区別がなされ，それを表示するための証明理由や実例が説かれるのである．

以上のように協定を成り立たすため，実例は不成ではない．しかもまた，これ（＝自己）が五取蘊のみを意図して実例を提示する場合，決して間違いは存在しない．そこで「自己」という語が用いられたのである．

Vaidya 159.16-24 (Tib D 168a5-b1, P 185b7-186a3)

idānīṃ prakṛtam upasaṃharann āha–

ここで，論述されたものを纏めて述べられる－

asvāmikāni duḥkhāni sarvāṇy evâviśeataḥ /
duḥkhatvād eva vāryāṇi niyamas tatra kiṃ kṛtaḥ //102//

苦の主体ではないことは，すべての人々に差別がないからである．苦である故にこそ，〔すべての苦は〕拒まれる．そこでどうして〔苦に〕限定がなされるのか．（第 102 頌）

na vidyante svāmino yeṣām ukta-krameṇêti vigrahaḥ / amamāni na kasyacit pratibaddhānîty arthaḥ / kutaḥ? kiṃ kānicid eva? na / **sarvāṇy evâviśeṣataḥ** /[39] na kvacit kasyacit svāmitvam asti, viśeṣâbhāvāt / **duḥkhatvād eva** svaparâvibhāgaṃ kṛtvā **vāryāṇi** niṣedhyāni bhavanti / nânyan nimittam asti tatrâtmīyatvâdi / tenâyaṃ **niyamaḥ kiṃ kṛtaḥ**, kena viśeṣeṇa kṛtaḥ? yena svakīyāni ca vāryāṇi na parakīyānîti/ evaṃ duḥkhatvād iti hetur anaikāntiko na bhavatîti

[39] Poussin / Vaidya: kutaḥ? kiṃ kānicid eva? na / sarvāṇy evāviśeṣataḥ/; Tib: gang cung zad thams cad nyid (P om. nyid) kyis ma yin no zhes khyad par du byed de / (D 168a6, P 185b8）.

samarthitaṃ //

説かれたことが次第して，「諸々の所有主は存在しない」と纏められる．諸々の無我なるものに属するものは決して存在しない，という意味である．なぜ，どうして決して〔存在〕しないのかというと[40]，**すべての人々に差別がない**からである．どこにおいてであれ，誰においてであれ，所有主の性質は存在しないのである．差別というものが存在しない故に．**苦であるからこそ**，自他の無差別をなして**拒まれる**，〔すなわち〕妨げがある．そこで，「自分自身」などという他の要素は存在しないのである．それ故に，「自身のものは拒まれるべきで，他のものは〔拒まれるべき〕でない」という，この〔自他の〕**限定がどうしてなされようか**．なぜ差別がなされようか．以上のように，「苦である故に」は不定因ではないと言いえる．

Vaidya 159.25-160.5 (Tib D 168b1-5, P 186a3-8)

nanu yadi duḥkhI nāma na kaścit saṃsāre saṃbhavati, tarhi duḥkham anivāryam eva syāt, kṛpāpātrasya duḥkhinaḥ kasyacid abhāvād ity āśaṅkamāna āha–

〔反論：〕それでは，もし苦を持つ者が輪廻上に決して存在しないならば，その場合，苦が拒まれることはないであろう．慈悲の主や，苦を持つ者が決して存在しない故に．このような疑問が起こると〔想定して〕論じられる－

duḥkhaṃ kasmān nivāryaṃ cet sarveṣām avivādataḥ /
vāryaṃ cet sarvam apy evaṃ na ced ātmâpi sarvavat[41] **//103//**

なぜ苦が拒まれるべきかというと，すべての人々にとって一致するからである．もし拒まれるべきならば，すべて〔の人々の苦が拒まれるべきである〕．もしそうでないならば，すべて〔の人々の苦〕と同様に自己〔の苦〕も〔拒まれてはならない〕．（第 103 頌）

na vāryam eva nirātmakatvād eva yadi manyase, tadā na yuktam etat / kutaḥ? **sarveṣām avivādād** avipratipatteḥ /[42] cārvākasyâpi sva-duḥkha-parihāreṇâivêha pravṛtteḥ / na ca teṣām ātmano ’bhyupagamād adoṣa, tat svabhāvasyânupalabdheḥ / na câbhyupagama-mātreṇa tasya sattā prasidhyati, tat sādhaka-pramāṇâbhāvāt, bādhakasya câneka-prakārasyâbhidhānāt / evaṃ sati yadi **vāryaṃ** duḥkham, tadā **sarvaṃ** vāryam, **na cet** sarvaṃ vāryam, tad**âtmâpi** /

[40] 文脈により Tib に沿って訳した．（注）39 参照．

[41] Minayeff: ātmāpi sarvavat; Poussin: ātmani sarvavat; Vaidya: ātmāpi sattvavat; Tib: bdag kyang sems can bzhin.

[42] Tib: rgol ba thams cad la rtsod pa med pa’i phyir la log pa (P om. pa) med par rtogs pa med pa’i phyir ro // (D 168b3, P 186a5)

upātta-pañca-skandha-svabhāvam api duḥkhaṃ na vāryam, **sarvavad** aviśeṣād ity upasaṃhāraḥ //
もし無我の性質である故に「〔苦が〕拒まれるべきではない」と汝が思うならば，その場合，それは理に合わない．なぜなら，**すべての人々にとって一致する**，〔すなわち〕違わない故に．チャールヴァーカでさえ，自己の苦を除くことに関してはここに含まれる故に．また彼ら〔すべての人々〕が自己を承認するから〔苦が拒まれるべきことに〕過失がないという訳ではなく，その〔苦の〕性質が不可得だからである．また〔自己の〕承認だけでその〔苦の〕存在が成立する訳ではない．それ（＝苦）を証明する認識手段が存在しなく，また多種の苦悩が説かれている故に．

以上のように，もし苦が**拒まれるべきであればすべての**〔苦が〕拒まれるべきであり，**もし**すべての〔苦が〕拒まれるべきで**ないならば自己の〔苦〕もまた**〔拒まれるべきではない〕．五取蘊を本質としても，苦は拒まれるべきではない．**すべての〔人々〕と同様に**，区別がない故に．以上が要約である．

Vaidya 160.5-11 (Tib D 168b5-7, P 186a8-b3)

syād etat– karuṇā-paratantratayā para-duḥkha-duḥkhinaḥ sarva-duḥkhâpaharaṇāya yatnaḥ / tad varaṃ bahu-duḥkha-nidānaṃ sa͡īva prathamato nôtpādayituṃ yujyata iti para-vacanâvakāśaṃ śaṅkamāna āha–

次のように〔反論〕されようー〔自他平等に基づく〕すべての苦を除くための努力とは，他者に従い生じる慈悲によって，他者の苦に苦しむということである．それは多くの苦の原因として際立ったものであり，はじめからそれ（＝慈悲）が〔苦を〕起こすことは理に合わないのである．このように他者の意見の余地を想定しつつ述べられるー

kṛpayā bahu-duḥkhaṃ cet kasmād utpadyate balāt / (104ab)

しかし「なぜ努めて，慈悲によって多くの苦を起こすのか」とうならば，（第104頌ab）

balād iti prayatnāt/ atrôttaram āha–

「**努めて**」とは意志的努力である．ここで話を進めて述べられるー

jagad-duḥkhaṃ nirūpyêdaṃ kṛpā-duḥkhaṃ kathaṃ bahu //104//

世間の苦に思いを致せば，どうしてこの慈悲の苦が多いといえようか．（第104頌cd）

jagato duḥkhaṃ narakâdi-kṛtam aneka-prakāraṃ samīkṣya **idaṃ kṛpā**-kṛtaṃ **duḥkhaṃ kathaṃ bahu**? nêdaṃ bahu kṛpā-duḥkham iti bhāvaḥ //
地獄などで作られる多種なる**世間の苦を**眺めれば，**この慈悲**により作られる**苦がどうして多いといえようか**.「この慈悲により〔作られる〕苦は決して多くはない」という意味である.

Vaidya 160.12-17 (Tib D 168b7-169a2, P 186b3-5)
kiṃ ca / aparam idam atrôttaram ity āha–
しかもまた，次にこの解決が述べられる－

bahūnām eka-duḥkhena yadi duḥkhaṃ vigacchati /
utpādyam eva tad-duḥkhaṃ sa-dayena parâtmanoḥ //105//
もし一人の苦によって多くの人々の苦が消えるならば，自他を憐れんで，その苦（＝一人の苦）は起こされるべきである.（第 105 頌）

ekasya puruṣasya **duḥkhena bahūnāṃ** sattvānāṃ **yadi duḥkhaṃ vigacchati** nivartate, tadā **utpādyam eva** janayitavyam etat tādṛśaṃ **duḥkhaṃ** / **sa-dayena** kṛpâtmakena **parasyâtmanaś** ca //[43]
もし一人の苦によって多くの有情たちの**苦が消える**，〔すなわち〕滅する**ならば，その**，〔すなわち〕斯くの如きの**苦は起こされるべき**，〔すなわち〕生ぜしめるられるべきである．**自己と他者を憐れんで**，〔すなわち〕慈悲よりなるものをもって.

Vaidya 160.17-161.10 (Tib D 169a2-b6, P 186b5-187b3)
utsūtratām asya pariharann āha–
「これは経典に反する」[44]という〔反論〕を斥けつつ述べられる－

---

[43] Tib: snying rje'i bdag nyid can gyi dam pas rang dang gzhan gnyi ga'i sdug bsngal bsal bar bya'o // (D 169a2, P 186b5)
[44] 第 104-110 頌は敦煌本に存在しない．また第 104,107,108,109 頌と同文がシャーンティデーヴァの『シクシャーサムッチャヤ』に『如来秘密経』の引用として用いられている（*Śikṣāsamuccaya*, p.193.5）．このことから第 104-110 頌は後世に付加され，そのうち第 104,107,108,109 頌は『シクシャーサムッチャヤ』でシャーンティデーヴァが提示した『如来秘密経』の文章を転用したと考えられる．「経典」とは『如来秘密経』を意味し，第 105,106 頌が『如来秘密経』に存在していない点を指摘しているのだろう.

ataḥ supuṣpacandreṇa jānatâpi nṛpâpadaṃ /
ātma-duḥkhaṃ na nihataṃ bahūnāṃ duḥkhināṃ vyayāt //106//

そこでスプシュパチャンドラ（＝善花月）は，王による加害を予想しながらも，自己の苦をなくそうとはしなかった．多くの苦しめる人々の〔苦〕を滅するために．（第 106 頌）

yata evôtpādyam eva tad duḥkhaṃ kṛpālunā sva-parâtmanoḥ **ata** eva **supuṣpacandreṇa** bodhisattvena/ **nṛpâdāpadaṃ** nṛpasya vā rājña āpadaṃ / **jānatâpi** budhyamānenâpi/ **ātma-duḥkhaṃ na nihataṃ** na nivartitaṃ / upekṣitam iti yāvat / tathā rājño 'pi para-loka-duḥkhaṃ / kim iti ? **bahūnāṃ duḥkhināṃ vyayāt** / duḥkhasyêti prakṛtaṃṣaṣṭhy-antatayā saṃbadhyate / yad uktaṃ supuṣpacandrasyêti vṛttake– tathā hi– atīte 'dhvani ratnapadmacandraviśuddhâbhyudgata-rājo nāma tathāgato 'bhūt / sa bhagavān buddha-kṛtyaṃ kṛtvā ciratara-kālam avasthāya parinirvṛtaḥ / tasmiṃś ca parinirvṛte śāsanântar-dhāna-samaye rājā śūradatto nāma babhūva / tasya ratnāvatī nāma rāja-dhānī / tasmin kāle dṛṣṭi-vipannāḥ sattvāḥ / teṣām anukampârthaṃ bahavo bodhisattva utpannāḥ pravrajitāḥ / te ca tato rāṣṭra-janapadebhyo nirvāsitāḥ samantabhadraṃ nāmâraṇya-vana-khaṇḍam upasṛtya viharanti sma sārdhaṃ su-puṣpa-candreṇa dharmabhāṇakena / atha khalu supuṣpacandrasya bodhi-sattvasya sattvān karuṇāyamānasya raho-gatasya cetasi vitarka udapādi– yann vahaṃ janapada-rāṣṭra-rāja-dhānīr gatvā sattvān ku-mārga-prapannān kalyāṇe vartmani prati-ṣṭhāpayāmi/ sa tam arthaṃ sabrahmacāribhyo nivedayāmāsa / tair nivāryamāṇo 'pi svayaṃ ca svâpadaṃ pratipadyamānas tasya rājño 'pi tato vana-khaṇḍān nirjagāma / sa krameṇa dharmaṃ deśayan tasya rājño rāja-dhānīm anuprāpto bahūn sattvān rājaputrâmātya-purohita-prabhṛtīn prakāraṃ vinīya satpathe vyavasthāpayan tena rājñā rājamārge dṛṣṭaḥ / saha-darśanena prakuptaḥ sarvaṃ ca janakāyaṃ tad āvarjitaṃ pratipadya īrṣyā-dūṣita-hṛdayaḥ / tad vadhârthaṃ sva-putrān ājñāpayāmāsa / tāṃś ca tad vadha-vimukhān pratipadya nandikaṃ vadhyaghātakam ājñāpayāmāsa / tena tad ājñām anuvartamānena kara-caraṇâdi-ccheda-krameṇâkṣīṇi ca saṃdaṃśikenôddhṛtya jīvitād vyaparopitaḥ / atha tasya bhikṣo rāja-mārga- gatasya jīvitād vyaparopitasya śarīre 'nekāny adbhutāni babhūvuḥ / tāni pratipadya sa rājā niścitaṃ bodhisattva evâyaṃ bhikṣur iti paritāpa-gato bahutaraṃ paridevate sma / iti supuṣpacandrasyêti vṛttakaṃ saṃkṣipya kathitaṃ / vistareṇa punaḥ samādhirājasūtre nirdiṣṭam iti tatra‿îvâvadhāryaṃ //

そういう訳で，自己と他者，双方を憐れんでその苦（＝一人の苦）は起こされるべきであるからこそ，**そこでスプシュパチャンドラ**菩薩**は**王による**加害を**，王・国王の加害を**予想しながらも**，〔すなわち〕考えていながらも，**自己の苦をなくそう**，〔すなわち〕滅しようとは思わなかった，という意味である．同様に，王の〔苦〕もまた未来

の苦（＝一人の苦）である．なぜなら，**多くの苦しめる人々の〔苦〕を滅するため**である．「苦」（duHkhasya）が〔偈頌で〕提示されている第六格の終わりに挿入されよう．

スプシュパチャンドラのことは，以下の事例（＝『三昧王経』[45]）のように説かれている．例えばー

「過去世に，ラトナパドマチャンドラヴィシュッダービュドガタ王（＝寶蓮華月浄起王）という名の如来がおられた．かの世尊は仏事を為して，長い間留まった後に般涅槃された．また，〔如来が〕般涅槃され正法が滅してしまったとき，シューラダッタ（＝勇健得）という名の王があった．彼の王都はラトナーヴァティー（＝王城門）という名であった．その時代に邪見に陥った有情たちがいた．彼らへの憐れみのために，多くの菩薩たちが生まれ，出家した．しかしそのために，彼ら（＝菩薩たち）は都市や地方から追放された．〔彼らは〕スプシュパチャンドラ法師と共にサマンタバドラという名の山林へ行き，暮らしていた．しかしながら有情たちを密かに憐れんでいたスプシュパチャンドラ菩薩の心には，ある考えが起こっていたー「私はまさに地方・都市・王都へ行って，邪見に陥った有情たちを正道に安住せしめよう」と．彼（＝スプシュパチャンドラ）はその目的を仲間たちに伝えた．〔スプシュパチャンドラは〕彼ら（＝仲間たち）に引き止められながらも，しかし一人で，かの王による己に対する加害をも受け入れつつ山林を出た．順次に法を説きながら，かの王の王都に到着した彼が王子・大臣・祭官などの多くの有情たちを正道に導き，安住せしめているのを，王者道でかの王は見ていた．〔王はそれを〕見て怒り，またすべての大衆が彼（＝スプシュパチャンドラ）に傾倒しているのを知り，心に嫉妬や侮辱を抱いた．そして，彼を殺すことを自分の子供たちに指示した．しかし彼ら〔子供たち〕は彼を殺すことを嫌がったので，〔王は〕ナンディカ（＝難提迦）という死刑執行人に指示した．彼（＝ナンディカ）は彼（＝王）の命令に従って〔スプシュパチャンドラの〕手足などを順に切り，また両眼を一対の火箸でくり抜いて命を奪った．さて王者道で命を奪われたかの比丘の身体には，たくさんの希有なることが起きた．これらを知ったかの王は，この比丘がまさに菩薩であることを確信し，心痛めた〔王〕は泣き続けた．」

以上がスプシュパチャンドラの事例を集め，語られたものである．詳しくは『三昧王経』に説かれている．よってそこを確認するべきである．

---

[45] *Samādhirājasūtra* supuṣpacandra-parivartaḥ 35(pp.233-240)

Vaidya 161.10-18 (Tib D 169b6-170a3, P 187b3-8)

na câpi kṛpāvatāṃ para-duḥkha-duḥkhināṃ mahad api duḥkhaṃ bādhakam iti pratipādayann āha–

しかもまた，他者の苦によって苦しむ慈悲深き者たちにとって，苦に悩まされることは決して多くないことを説明しつつ述べられる－

evaṃ bhāvita-saṃtānāḥ para-duḥkha-sama-priyāḥ /
avīcim avagāhante haṃsāḥ padma-vanaṃ yathā //107// [46]

以上のように〔自他平等に基づいて，心〕相続が修養された人々には，他者の苦に匹敵するだけの楽しみがある．彼らは，あたかもハンサ鳥が蓮華の叢に〔潜る〕ように無間地獄に趣くのである．（第 107 頌）

evaṃ parâtma-samatayā **bhāvita-saṃtānāḥ** anābhoga-pravṛtta-citta-saṃtatayaḥ / **para-duḥkhena samaṃ** tulyaṃ **priyaṃ**[47] sukha-hetur yeṣāṃ te tathā/ ātma-sukham api para-duḥkhena duḥkham eva yeṣām ity arthaḥ / te **'vīcim avagāhante** para-vyasana-samuddharaṇāya tad-duḥkhaṃ sukham eva manyamānāḥ / idam evâha– **haṃsāḥ padma-vanaṃ yathā**/ āvīcikam api duḥkhaṃ sukham eva parârthe yeṣāṃ te / kena duḥkha-hetunânyena duḥkhino bhaviṣyanti? **以上のように**，〔すなわち〕自他平等によって**相続が修養された人々には**，心相続が無功用に活動しているのである．彼らには**他者の苦に匹敵するだけの**，〔すなわち〕同量の**楽しみ**，〔すなわち〕安楽の原因**がある**．他者の苦によって苦しむことも自己の安楽である，という意味である．他者を不幸から救い出すために彼らが**無間地獄に趣く**ことで，その苦はまさに安楽と感じられるのである．次のように言われている－「**あたかもハンサ鳥が蓮華の叢に〔潜る〕ように**」と．他者のためならば，無間地獄の苦さえも安楽である彼らにとって，どうして他の苦の原因によって苦しみが起こるであろうか.

Vaidya 161.18-23, Tib D 170a3-b2, P 187b8-188a7

api c a/ sukham api teṣām asādhāraṇam evôpajāyate para-sukhena[48], ity upadarśayann āha–

---

[46] Tib: de ltar rgyud ni goms gyur la // gzhan gyi sdug bsngal zhi (P zhing) dga' bas // pad ma'i mtsho (P 'tsho) ru ngang pa ltar // mnar med par (D pa) yang 'jug par 'gyur //107 (D 27b4, P 31a7)

[47] Tib: gzhan gyi sdug bsngal zhi zhing mnyam par dga' ba (P nyams dga' ba) ste / (D 170a1, P 187b5)

[48] Tib: gzhan yang de rnams kyi bde ba yang thun mong ma (P pa) yin pa nyid gzhan gyi sdug bsngal gyis skye bar 'gyur te / (D 170a3, P 187b8)

さらにまた，他者の安楽によって彼らの安楽さえも特殊なものとして生起する．このことを説明しつつ述べられる－

mucyamāneṣu sattveṣu ye te prāmodya-sāgarāḥ /
tair eva nanu paryāptaṃ mokṣeṇârasikena kiṃ //108//
sems can rnams ni (D rnam par) grol ba na // dga' ba'i rgya mtsho gang yin pa //
de nyid kyis ni chog min nam // thar ba 'dod pas ci zhig bya //108

有情たちが解脱しつつあるときに，〔自身の心相続が〕歓喜の海となる彼らは，それら（＝歓喜）をもって満たされたではないか．味わいのない〔個人の〕解脱に何の用があるのか．（第 108 頌）

duḥkha-bandhanād visaṃyujyamāneṣu **sattveṣu** satsu / **ye te** iti/ teṣām evânubhava-siddhatvād idamtayā[49] kathayitum aśakyāḥ, ata eva **prāmodya-sāgarāḥ** saṃtuṣṭi-samudrāḥ kṛpāvatāṃ saṃtāneṣu prādurbhavanti / **tair eva** prāmodya-sāgaraiḥ **paryāptaṃ** tad anya-sukha-vaimukhyāt parisamāptaṃ / *****

有情たちが苦の束縛から逃れつつあるとき，である．「**そのときに彼らは**」とは，彼らにとってこそ感受が成立するのであり，この性質のため，説明することは出来ない．それ故にただ，**歓喜の海**，〔すなわち〕喜悦の大海とは，慈悲深き諸々の相続を起こしているのである，〔とだけ示しておく〕．**それらをもって**，〔すなわち〕歓喜の海をもって**満たされた**とは，ほかの安楽を捨てるから彼は満たされたのである．

bde ba thams cad spangs pa yin no zhes bya ba'i tha tshig go // ci ste de nyid bde ba'i mthar thug pa ci ltar yin te / gcig tu nyon mongs pa'i yongs su gdung ba nye bar zhi bas rnam par grol ba'i bde ba yin pa'i phyir shin tu lhag pa yin no zhe na / ro bral thar ba zhes pa la sogs pa gsungs te / thar ba yang de la ltos nas de rnams ro dang bral ba nyid du snang ngo // dgongs pa ni 'di yin te / gzhan la phan pa dang bde ba bsgrub pa nyid de rnams kyi ro'i mchog nyid kyis zhugs pa'i phyir de la mngon par zhen pa yin la / snying rje dang ldan pa rnams la bde ba de nyid dgos pa yin gyi (P gyi /) thar ba ni ma yin no // de gal te nyams su len pa la ched cher byed na thar ba yang mngon du gyur na yang gzhan gyi don de nyid la ched du gnyer ba ni ma yin no // gang gsungs pa/ 'gro ba ma lus rang bzhin mngon du mdzad gang gi // (P gis /) de bzhin gshegs pa nyid ni zhar la byung ba ste // gzhan dbang gyur pa khyod kyi yon tan rnams las ni // cung zad tsam zhig tshig gi rjod byed snyan dngags mkhan // (P om. //) zhes so / (P so //) gang gi phyir thar ba la rings pa med pa de'i phyir te /

[49] Poussin / Vaidya: idaṃtayā; Tib: idamtayā.

[50]あらゆる安楽を捨てる，という意味である．一体どうして彼のみ（＝個人）に安楽が成就しえようか？ 個人が煩悩に苦しめられることを断じて解脱する安楽である故に「優れている」とするならば，「味わいのない〔個人の〕解脱･･･」などと言われている．すなわち，その〔個人の〕解脱を観察して，彼ら〔菩薩たち〕は味わいのないものであることを知るのである．

以下が目的である－他者に利益と安楽を成し遂げた彼ら〔菩薩たち〕が，味わいが卓越して起こっていることでそれに執着することがあっても，慈悲深き者たちにその〔味わいによる〕安楽が目的である解脱は存在しないのである．もしそれをもっと得ようとする場合，または〔個人の〕解脱へ向かった場合，かの利他の性質を目的に向かうものではない．〔その目的とは〕「全ての人々を自己の如くに捉える」ことと言われている．

以上で傍論は終了した．「汝の諸々の功徳は他者を主体とする故に」と僅かながら詩で述べられている．どうして解脱を急がないのかというと，そのためである．

Vaidya 161.24-25, Tib D 170b2-b4, P 188a7-b2

ataḥ parârthaṃ kṛtvâpi na mado na ca vismayaḥ /
na vipāka-phalâkāṅkṣā parârthâĩkānta-tṛṣṇayā//109//
de ltar gzhan gyi don byas kyang // rlom sems dang (P de) ni ngo mtshar med //
gcig tu gzhan don la dga' bas // rnam smin 'bras bu'i (P bu) re ba med//109

それ故に他者の利益となることを為しても憍ることはなく，また誇ることもない．ひたむきに他者の利益を渇望するのであり，果報を期待することはないのである．（第 109 頌）

rgyu 'di las **gzhan gyi don byas kyang** ste / de la sems gzhol bar zhugs pas **rlom sems** dang rgyags pa ma yin la / **ngo mtshar ba** yang **med** de dka' ba spyad pas rmad du byung ba'i blo yang de rnams la skye bar 'gyur ba ma yin te / bdag gis dam pa'i las byas pa 'di'i (P 'di yi) las kyi rnam par smin pa'i 'bras bu 'jig rten pha rol tu 'byung bar 'gyur ro zhes pa dang / **rnam par smin pa'i 'bras bu la** 'dod pa yang skye ba **ma yin no** // 'di'i rgyu **gcig tu gzhan don la dga' bas** zhes gsungs te / gang **gzhan gyi don rnams la gcig tu** ste / (P om. /) dgos pa gzhan la ltos (P bltos) pa med pas khyad par du shin tu dga' ba yin te de nyams su len pa la tshim pa med pa yin la rgyu des so // 'dis ni bdag dang gzhan du mnyam pa'i 'bras bu'i skabs kyi khyad par de bstan par 'gyur ro //

[50] これ以降，*BCAP* の Skt を欠くため，Tib 訳を補う．

この原因により，**他者の利益となることを為しても**，低俗な心を起こして**驕ること**，〔すなわち〕自惚れること**はない**．**また誇ること**，〔すなわち〕苦難を為すことで「自分が優れた行為を為し，この行為の果報が来世に生じるのである」と奇異な意が彼らに生じること**はない**．また**果報を期待して**も生じるのでは**ない**．この理由で，**ひたむきに他者の利益を渇望し**と述べられている．**諸々の利他をひたむきに**，〔すなわち〕他の目的を見るのではなく〔利他という〕殊勝によって好まれるのであり，それ（＝果報）を受け取るのに満足しないことを原因としてである．これは自他平等の結果における殊勝を教示したのである．

Vaidya 161.26-28, Tib D 170b4-b6, P 188b2-5

de ltar na zhar la byung ba de ltar brjod nas (P nas/) skabs su bab pa mjug bsdu ba'i sgo nas bstan par bya ba'i phyir / (P om. /) de bas zhes bya ba la sogs pa gsungs te //

以上のような関係であることを示してから，主張の結論を示しつつ「そこで･･･」などと述べられるー

tasmād yathântaśo 'varṇād ātmānaṃ gopayāmy aham/
rakṣā-cittaṃ dayā-cittaṃ karomy evaṃ pareṣv api//110//
de bas ji ltar chung ngu na // mi snyan las kyang bdag bsrung ba/ /
de bzhin gzhan la bsrung sems dang // snying rje'i sems ni de ltar bya //110

そこで，あたかも誹謗されることからでさえも私が自分を護るように，私は他の人々に対しても，護ろうとする心や慈しみの心を起こそう．（第 110 頌）

gang gi phyir brjod pa'i rim pas bdag dang gzhan la khyad par cung zad kyang med pa de (P bde) bas na'o // **chung ngu na** zhes pa ni sdug bsngal gyi rgyu cung zad tsam **mi snyan pa las kyang bdag bsrung zhing** sba bar bya'o //

説かれたことが次第して，自他に差別は決して存在しないのである．それ故に，「**～でさえ**」とは，苦の僅かな原因である**誹謗されることから**であっても**私が保護する**，〔すなわち〕護るということである．

略号とテキスト

1. 一次文献

BCA : *Bodhicaryāvatāra* (Śāntideva)

BCAP : *Bodhicaryāvatārapañjikā* (Prajñākaramati)

Tib : Tibetan TripiTaka

2. 二次文献

Minayeff :

I.P. Minayeff ed., *Bodhicaryāvatāra*, *Zapiski Vostochnago Otdeleniya Imperatorskago Russkago Arkhealogicheskago Obshchestva, vol.4*, The Royal Russian Archeological Society (St.Petersbourg, 1890).

Poussin :

Louis de La Vallée Poussin ed., *Bodhicaryāvatārapañjikā, Prajñākaramati's Comentary to the Bodhicaryāvatāra of Śāntideva, Bibliotheca Indica Nos.983, 1031, 1091, 1126, 1139, 1305, 1399* (Calcutta, 1901-1914).

Vaidya:

P.L. Vaidya ed., *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with the Commentary Pañjikā of Prajñākaramati, Buddhist Sanskrit Texts-No.12,* The Mithila Institute (Darbhanga, 1960).

D :

The *sde dge* edition of the Tibetan Tripiṭaka.

〔BCA〕The *sde dge* edition of the *Bodhicaryāvatāra*, No.3871; デルゲ版チベット大蔵経・論疏部 10, 世界聖典刊行協会（東京, 1978）.

〔BCAP〕The *sde dge* edition of the *Bodhicaryāvatāra-pañjikā*, No.3872; デルゲ版チベット大蔵経・論疏部 10, 世界聖典刊行協会（東京, 1978）.

P :

The *Peking* edition of the Tibetan Tripiṭaka.

〔BCA〕The *Peking* edition of the *Bodhisattva-caryāvatāra-saṃskāra*, No.5272; 西蔵大蔵経研究会編輯:『印影北京版西蔵大蔵経』第 99 巻（東京・京都, 1957）.

〔BCAP〕The *Peking* edition of the *Bodhi-caryāvatāra-pañjikā*, No.5273; 西蔵大蔵経研究会編輯：『印影北京版西蔵大蔵経』第 100 巻（東京・京都, 1957）.

敦煌本 ：

Akira Saito ed., *A Study of the Dun-huang Recension of the Bodhisattvacaryāvatāra,*

A Report of Grant-in-Aid for Scientific Research (C) (Mie University, 2000.3) .

Śikṣāsamuccaya (Śāntideva) :

P.L. Vaidya ed., *Śikṣāsamuccaya of Śāntideva, Buddhist Sanskrit Texts-No.11,* The Mithila Institute (Darbhanga, 1961).

Samādhirājasūtra :

P.L. Vaidya ed., *Samādhirājasūtra, Buddhist Sanskrit Texts-No.2,* The Mithila Institute (Darbhanga, 1961).

東洋大学大学院文学研究科仏教学専攻
博士後期課程 3 年
Graduate Student
Graduate School of Letters,
Toyo University
Tokyo, Japan